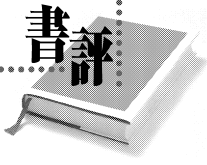


書評



加藤 敏, 八木剛平 編著

レジリアンス

現代精神医学の新しいパラダイム

鈴木國文

『レジリアンス—現代精神医学の新しいパラダイム』と題された本書は、「レジリアンス」という我々精神科医にとってあまりなじみのない概念をめぐり、加藤敏、八木剛平という斯界のオピニオン・リーダー 2 人が編んだ入門の書である。編者の他に、精神病理学と生物学的精神医学の双方から 11 人の著者が筆を執っている。

私は「新しいパラダイム」といったことが謳われている書物をあまり信用しない。科学哲学者 Kuhn がいう意味で真に刷新されたパラダイムなどが 1 人の科学者の思考史の中に現れることなど、まずないからである。「新しいパラダイム」と謳われる事柄のほとんどが、その科学者がそれまで信じてきた「科学」の有効範囲の限定に過ぎない。では、本書もそうなのだろうか…。本書の 2 人の編者は、近代医学のあり方には精神障害のある部分を見逃す構造が本質的にあることを、ずっと指摘し続けてきた論者である。近代医学のこの限界に関し、「レジリアンス」という視点を得て、新たにその本質に迫ろうとする本書は、確かに「新しいパラダイム」を志向した書とっていいだろう。しかし、「新たなパラダイム」に乗ることの難しさは、参加した執筆者の幾人かが得た印象でもあったのではないだろうか。

3 章までの総論では、この概念の歴史と意義が論じられている。レジリアンスは「しなやかさ」とか「反跳性」、さらには「疾病抵抗力」と訳される概念で、「発病モデルよりも回復モデルに依拠した医療への転換」を促す概念である。そして、「近代医学の誕生にとっては、自然治癒力の否定こそが重要な契機であった」た

めに、レジリアンスは長い間、近代医学の視野の外に置かれてきた、と指摘されている。

その後に続く各論では、PTSD、うつ病、統合失調症それぞれにおけるレジリアンスをめぐり、異なる領域から論考が寄せられ、読み応えのある 7 章が続いている。PTSD については、レジリアンスという概念の位置が比較的とらえやすい。同じ「外傷体験」があっても、ある人は PTSD になり他の人はならない。一方には「vulnerability (脆弱性)」を、他方には「resilience (反跳性)」を想定することができるだろう。しかし、内因性の疾患のように、疾患の過程が複雑になればなるほど、この概念の位置はとらえにくくなる。「脆弱性」の低さが「反跳性」の高さであるようにも見え、さらには、ある「脆弱性」が病前のある時点までは適応を高めていることもあると思われるからである。つまり、医学という視点の中では脆弱性と反跳性はしばしば同じことの裏表としてとらえられてきた。

そのためだろうか、各論になると、レジリアンスという概念に対するそれぞれの書き手の立ち位置に、微妙な差異が現れることになる。

しかし、精神医学は今、確かに、精神障害の本質へと迫る思考モデルを手にはしていない。広い領域の著者が、新たな視点のもと種々の障害を論じようとした本書は、そうした精神医学にとってきわめて貴重な試みであることは間違いない。

(名古屋大学医学部保健学科)

●A5 231 頁 2009 定価 3,990 円(本体 3,800 円+税) 金原出版